

特集 2

ルーヴェン・カトリック大学・都市研究プラザ
ジョイントワークショップ／スタディツアー

SPECIAL 2 A joint workshop by Leuven Catholic University (KUL) and OCU-URP and study tours

2009年9月1日（火）から9月5日（土）にかけて、都市研究プラザはルーヴェン・カトリック大学（以下KULと称する）地理学部の協力のもと、ベルギーにてワークショップとスタディツアーを行った。この訪問の目的は、KUL地理学部とのジョイントワークショップを開催し、都市再生や社会的排除についての意見交換を行うこと、そしてこうした主題がベルギーにおいて有するリアリティを探求するべく、ベルギー諸都市のスタディツアーを行うことであった。また“*City, Culture and Society*”のヨーロッパでの編集任務について詳しく説明することも重要な目的であった。大阪市立大学都市研究プラザからは、水内俊雄副所長、G-COE特別研究員のコルナトウスキ、熊谷、北川が参加した。中山徹氏（都市研究プラザ特別研究員／大阪府立大学人間社会学部教授）、日本最大のNPOの1つで、首都圏でホームレス支援を行っているS.S.S (Social Security Service) の小川卓也氏も参加した。



ルーヴェン・カトリック大学でのワークショップ

From September 1 through 5, the URP in cooperation with Leuven Catholic University (KUL) organized a workshop and several study tours in Belgium. The purpose of our visit was to convene a joint workshop with the KUL Geography Department, exchange opinions on urban regeneration and social exclusion, and visit several Belgian cities in order to explore how these issues manifest themselves in Belgium. Moreover, we elaborated on an editorial role for a European edition of “*City, Culture and Society*”.

The workshop was titled “Comparative Approaches to Urban Regeneration and Social Exclusion in Western Europe and East Asia,” and both parties did presentations on themes covering issues such as homelessness, immigration, the status of asylum seekers, and new community structures amidst gentrification processes.

Four study tours were conducted to Antwerp, Ghent, Brussels and Beringen. This gave us the opportunity to observe gentrification processes, neighborhood/community regeneration strategies, services for the homeless, immigrants and asylum seekers, and creative forms of art and social inclusion. In summary, our visit to Belgium was a great opportunity to apply a new approach to the dynamic status of East Asian cities, seen from the current conditions of Europe.

■ワークショップ

9月4日（金）に、ルーヴェン・カトリック大学で「西ヨーロッパと東アジアにおける都市再生と社会的排除の比較研究Comparative Approaches to Urban Regeneration and Social Exclusion in Western-Europe and East-Asia」と題したワークショップを行った。KULと都市研究プラザの双方から、これらの地域（大阪、東京、上海、ヘント、ブリュッセル、ランペドゥーザなど）における都市再生、あるいはホームレス、移民、日本ではそれほど社会的に認知された事象とはなっていない庇護申請者に関する社会的排除の現状と支援のあり方についての発表がなされた。またそこから、排除と貧困の重層性を理解する上では経済メカニズムの分析が重要であるという指摘や、コミュニティの概念を地区という範疇に区切ることの問題や、都市に包摂されるvillageという着想の是非などに関する質疑がなされ、非常に刺激的な意見交換が展開された。

Programme

- Maarten Loopmans (Research Group Social and Economic Geography, K.U. Leuven) Fortress Flanders? Housing and Housing Rights for Asylum Seekers and Illegal Immigrants in Flanders.
- Toshio Mizuuchi (URP, Osaka City U.) Historical Development of Urban Renewal for the Former Outcast Minority People and Areas in Japan
- Stijn Oosterlynck (ASRO K.U. Leuven) Going beyond Physical Urban Planning Interventions: Fostering New Social Relations through Urban Renewal in Brugse Poort, Ghent
- Mika Kumagai (URP, Osaka City U.) Spatial Analysis of Social Problems in Osaka, 1995-2005
- Chris Kesteloot (Research Group Social and Economic Geography, K.U. Leuven) The Socio-spatial Structure of Brussels and Urban Dynamics: Suburbanisation, Gentrification, Urban Renewal and Exclusion
- Geerhardt Kornatowski (URP, Osaka City U.) Homeless Issues in East-Asian Developed Countries: A Focus on “Socially Disadvantaged Areas” in Inner-city Districts
- Takuya Ogawa (NPO Social Security Service) and Tohru Nakayama (Dpt. of Social Welfare, Osaka Prefecture U.) Housing Aid Activities for the Homeless by Non-profit Organizations in Japan: The Case of Tokyo
- Shinya Kitagawa (URP, Osaka City U.) A Space for Tourism or for Immigration?: The Challenge Faced by the Island of Lampedusa to Become an Overlapping Space for the Euro-Mediterranean
- Yannan Ding (K.U.Leuven) Immigration in Chinese Cities: Villages in Cities

■スタディツアー

初日の9月1日（火）は、アントウェルペン（オランダ語Antwerpen、フランス語Anvers、英語Antwerp）を訪れた。最初に世界的にその名が知られてきたダイヤモンド街の見学を行った。それから、メーイル通りMeirという巨大なショッピング・ストリートを歩きながら、都市の中心部へと進んでいった。その後は大聖堂と市庁舎を見学してから、街の新旧の顔が交差する古い港スヘルデScheldeを訪れて、最後に北に位置するいわゆる飾り窓地区Schipperskwartierを通過して、鉄道駅の傍にあるチャイナタウンを見学した。

翌9月2日（水）は、ユネスコに創造都市として登録されているヘント（オランダ語Gent、フランス語Gant、英語Ghent）を訪れた。KULのステイン・オーステルリンクStijn Oosterlynck氏の案内を通じて、特に19世紀の工業地帯地域の都市再生の様子を伺うことができた。ヘントでは、比較的安価な住宅ストックが並んでいる「ブルージュ門Brugse Poort」に足を運んだ。かつて栄えた織物工業の労働者たちの住居であったが、長らく移民たちがそこに居住してきた。しかし、最近では比較的富裕な若いベルギー人たちがこの地域に関心を寄せはじめ、それに呼応して住宅価格が上昇しているのがあった。オーステルリンク氏は、若い人たちは共同体でのまとまりのある生活を喚起させる本物らしい住宅群の雰囲気の魅力を感じているのだと述べていた。歩を進めるうちに、コミュニティの住民への支援が積極的に取り組まれているエリアに案内された。そこは最近設けられたという近隣センター、社会的包摂の活動に従事しているアート集団、中古の家具を売っている社会的企業などが集まる興味深いエリアであった。



ヘントでの2人のスペシャリストによる現地説明

9月3日（木）には、KULのブルーノ・メーウスBruno Meeus氏の案内で、ブリュッセル（フランス語Bruxelles、オランダ語Brussel、英語Brussels）を訪れた。はじめに、旧城壁内ペンタゴンの中心部から少々西部にあるジェントリフィケーションが進む地域の一面に位置するホームレスのドロップインセンターを見学した。ここではホー

ムレスが（非登録の）移民でもありうる、（非登録の）移民がホームレスでもありうるという現代ヨーロッパ社会の趨勢を、社会と政治との重層的な関係性の一端を伺うことができた。その後は、ペンタゴンから西へ旧城壁を出たブリュッセルのインナーシティに入り、アンデルレヒトAnderlechtとモーレンベークMolenbeekへと向かった。これらの地域には、中古自動車販売に特化するセネガル人などの移民たちが多く居住している。また東接するモロッコ人街における移民コミュニティと、ホワイトベルギー人の新住居街区とのコンフリクトの現状に対する説明も受けた。



ブリュッセルのホームレスドロップインセンター内

最終日の9月5日（土）には、一部ミシェル・コルナトウススキ氏の案内によって、ベリンゲン（オランダ語・フランス語・英語ともBeringenと表記）というかつての炭坑都市に足を運んだ。移民の社会統合センターを訪れたが、そこでかつて炭坑労働者地区の「ゲッター化」と炭坑周辺で進行するジェントリフィケーションの傾向について伺うことができた。この傾向は「ゲッター化」には歯止めとなるが、一方で手頃な価格の住宅供給を維持・確保することが難しくなっているとのことである。

■評価

ベルギーの5日間では、コミュニティとしての近隣地区の再生、ホームレスや移民、庇護申請者への支援、そしてアートと社会的包摂の自律的・創造的節合のかたちなど、都市研究プラザの研究実践と非常に親和的な内容を通して、西ヨーロッパの現在の都市の姿を肌で感じ取ることができた。都市研究プラザが取り組んでいる課題が、世界のあちこちで共通して取り組まれる必要のあるグローバルな課題であることを確認すると同時に、こうしてヨーロッパなど世界の他地域から照射されることで、（東）アジア都市論が有する特異性もよりいっそう表出してくるに違いないという感触を得ることができた。

■ヒェラルド・コルナトウススキ（G-COE特別研究員）
北川真也（G-COE博士研究員）